

三河アララギ

平成二十五年

七月号

第六十卷 第七号



ニューヨーク日記(81) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

June 2, 2013 : Summer BBQ

Blue Shoe Diaries



春はスキップして突然夏に突入?って感じの天気なので BBQ したい気分!都合良くアパートの共同パティオに住民なら使えるバーベキューグリルが置いてあるので早速チャレンジ。ステーキやハンバーガー、ソーセージ、チキン、ズッキーニやレタスまでグリルしてしまいました!結果は大成功!後は冷たいロゼで流して一日中外で過ごした夏の日曜日!

We skipped spring and went straight into summer. Or so it seems. So what is one to do but to have a BBQ! Conveniently, we have a communal patio in our building equipped with barbecue grills! With the help of an expert griller, our grilling menu consisted of NY strip steak, awesomely flavored burgers, turkey burgers, chicken, hotdogs, zucchini, romain hearts. And on the non-grilled side, a bunch snackies to pass the time. To wash it all down, cold cold rose. I'd say it was the perfect summer kick-off. Looks like we'll be doing this regularly!

目次

第六十卷第七号(通卷七一五号)

表紙	ほうずき
ニューヨーク日記(81)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	
歌集「スモン」	
水無月の海	
如何にか	
生きみれば	
短歌	
カラスビシヤク	
櫻	
春の山里	
石巻山	
時は流るる	
石南花	
鯛来た	
母の形見	
愛らしく	
夏場所	
魔笛	
武者人形	
教へ子よ	
眼差し	
スナック豌豆	
据膳	
竹林	
鶯	

今泉	由利	(1)
Blue Shoe		(2)
大須賀寿恵		(4)
岡本八千代		(5)
今泉	由利	(6)
弓谷	久子	(7)
青木	玉枝	(8)
内藤	志げ	(9)
佐藤	喜仙	(10)
林	伊佐子	(11)
安藤	和代	(12)
伊藤	忠男	(13)
胃甲	節子	(14)
鈴木	孝雄	(15)
清澤	範子	(16)
半田	うめ子	(17)
近藤	映子	(18)
伊与田	広子	(19)
足立	晴代	(20)
杉浦	恵美子	(21)
平松	裕子	(22)
山口	千恵子	(23)
小野	可南子	(24)
夏目	勝弘	(25)
阿部	淑子	(26)

螢ぶくろ	
吉祥山	
夕暮れの町	
贈呈誌	
『ことよせ』	
『俳句』	
私の一首	
「歴代天皇御製歌」(十三)	
ある自然科学者の手記(14)	
絹の話(32)	
物理学者と詩歌の世界(42)	
短歌に詠まれた茂吉	
楽しい時間(8)	
子規の短歌革新とアララギの歌人(12)	
「鍼の如く」 其の三	
「水魚」のことから(150)	
ことのはスケッチ(415)	
編集室だより(二〇一三年五月)	
和菓子街道(81)	
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

富岡	和子	(27)
白井	信昭	(28)
秋山	逸穂	(28)
いーはとぶ		(29)
植村	公女	(31)
青木	玉枝	(32)
岡本八千代		(32)
青木	皓一	(33)
大橋	望彦	(33)
今泉	雅勝	(34)
貫名海屋資料館		(38)
今泉	一石	(36)
鮫島	満	(37)
山本	紀久雄	(40)
佐藤	喜仙	(42)
夏目	勝弘	(44)
岡本八千代		(46)
今泉	由利	(47)
平松	温子	(48)
和菓子		(50)
お知らせ		(51)
編集後記		(52)
三河アララギ規定		(52)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

巻きのぼる草蔓なども引きちぎる右巻き左巻きかまふことなし

P
40

限りなき横着しつつ朝起きにめろめろとして体よろめく

P
41

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

入試の子の傍にミルク溶きやりて飲み終りたれば吾は寝にゆく

亡き母の夢見し今朝よしみじみと仏壇に向ひ香などたきぬ

スモンなりと初めてつけられし病名よ東大構内の池の辺歩く

水無月の海

蒲郡 岡本八千代

稻生いのうの海御津の海へとつづきつつ遠々と見ゆ白波一すぢ

ありし日の先生と君らよ浮かびくる年月流れて水無月の海

夕茜海に映りて波ただよふそのくれなるのあはれ淡々あはあは

ひとり帰る海辺の小道のほのあかり空の低きに上弦の月

心配ごといつしか忘るるごとくして帰りゆくなり海辺の小道を

人ひとり誰にも逢はずに帰るなり己が思ひのただあるがまま

わが背丈超えて咲き咲く月見草の夕べの庭にじつと佇む

哲学書全八巻の届きたり月見草ぐさ咲くたそがれの中

なにもかも心ほがらになりてきぬ「うその楽しみ」の本を読みつつ

四弁よんの黄きいの花々月見草つきみぐさ咲くがままなりあるがままなり

如何にか

東京 今泉 由利

江戸古地図辿りてゆけり東京都新築ビル群昔を無くし

この日頃私の思考に入りきたり如何にか如何にニユートラリーノ

麦の穂を左手に持つ乙女座は麦稔りゆく畑上空

白妙のカタルパの花花咲けりアルゼンチンにて知り初めしこと

古里の空に有りたり北斗七星祖父と辿りき北極星を

二等級に輝やきはじむ木星と金星土星今日の夜空は

月齢は十四にして黄金の月のかかれる私の窓

富士山の噴火せし日の溶岩のゴツゴツひと片テーブルの上

たはやすく新種いでくるバラの花自然に咲いたバラ色恋ほし

年毎の同じ所の山ユリの咲き出づ庭よここに育ちき

生きゐれば

豊川 弓 谷 久 子

孫が読み子が読み我にと巡り来む推理小説楽しみて待つ

衰えし視力労わり一冊を時かけて読む楽しみて読む

尾の長きとかげも蛇も小蛙も住みゐて賑わし我が草の庭

何時の間に姿消えしか石路にちんまり住みゐし緑の蛙

食パンを細かく砕く夜明けとともに騒ぐ雀の声に急かれて

少しだけ一茶の心に触れゐるか我のくらしの雀と蛙

生きゐればこそ顔見られると今日も又ベッドの姉に語りかけたなり

我が母の若き頃を憶はする古き縞柄の着物解きををり

大正のロマンよ椿の花柄の夢二好み of 着物と逢ひぬ

今季最後と苺届きぬ苺ジャム作る手際も馴れ来しものを

短^う歌^た

新城 青木玉枝

独居の庭に真白きつつじ咲く青葉若葉の風にそよぎて

真夜さめて眠られぬまま指折りて短^う歌^たを作りつ朝明けを待つ

何^な故^な何^な故^なと吾が身を責める日びにして古里恋し三河の海が

故里へ思ひ残して十六夜の月に足もと照らされ帰る

われひとりテレビに流れるナツメロのなつかしき歌共に歌はむ

わが足でトイレに行けるを究極の幸と悟りぬ何時迄続くを

まだ暗き玄関を出で空見上ぐ残月の光りのほのぼのとして

山並の東より朝陽のぼりきて夕べには西の山並に消ゆ

山里に住みて野菜は新^{あた}らしく魚はまずし海の育ちは

下り藤空家の庭に咲き盛り見る人もなく吾ひとり見る

カラスビシヤク

豊川 内藤 志げ

藪の坂登り来たりて門の径カラスビシヤクにしばし佇む

数本のカラスビシヤクは芯延ばし群なして咲き向きそれぞれに

寒きこと一人言ひつつ早終いお日様高し五月の初日

散り残る牡丹の花に西の風夕陽の中にひとときの輝き

東より鋭く一声ホーホケキヨ五月の半ばわれに初鳴き

鶯の去りたる辺りに甲高き鶉の声いつもの二羽か

竹の枝えに段を違たがへて大き鶉鳴かず動かず東の藪に

風通る涼しき所に腰を据へ細き棘萑の塊りほぐす

はらはらとひらひらと舞ひ落つる竹の紅葉日盛りの中

晴れ続き竹の紅葉の色のよし降るほどに見ゆ掃くほどもなし

櫛

東京 佐藤喜仙

武蔵野にふさはしき木といふならば誰しも上ぐるそは櫛なり

東大の三四郎池に佇めば小さき島より揚羽とびたつ

心字池のほとりをぐるりたもとほる辺の石に亀休みをる

五時告ぐる時の鐘の音聞こゆれば常臥の身に一抹の侘

日本海は夏の風耀ひてはるかに佐渡の鳥影の見ゆ

自宅へと駅を出づればつばくらめ宙返りして我を迎ふる

ひとすじの窯の煙の立ち登る空に整然かりがねの群

青苔の上に落ちたる椿の花緑の中に己さらしぬ

孫達の子供祭りの見守りにハリ灸すへて老いにむちうつ

山独活を採りて帰宅の背負籠その香を入れて和へ物とせる

春の山里

岡崎 林 伊 佐 子

草も木も艶かに萌ゆる春の山森林浴かね散策たのしむ

散策をしながら道辺の岩清水くちつけつつごくぐくと飲む

ぜんまいも蕨もつみに帰省して人住む里に人影も見ず

けだものの手の平に似る椴の芽を夫が器具にて数多とりたり

椴の芽の天ぷら旨き夕餉に珍味な味と孫らが喜ぶ

ふる里に帰りて働くいち日は遠き夕陽も山にぞ沈む

雨一過すぎて種まく移植する今日も終日鋤ふりてをり

さようならも言へずに逝きまし親友の突如の悲報に心みだるる

畑にて共に語らひ寛ぎし四十年の縁しのびぬ

友のこと偲びて畑に働けば涙と汗が目にしみてきぬ

石巻山

豊川 安藤 和代

濃淡の新緑もくもく石巻山吾が心にも力湧きくる

マラソンの完走者欄に子の名あり幾度も見つつ一日の過ぐ

蒲公英の綿毛は夢に向ひつつ今しふわりと旅立ちてゆく

味噌汁やパン焼く香りながれきて吾が町内の朝の始まる

無口なる夫は二日目臥す吾に食べたいものはないかと聞けり

一瞬に散るひらめきよ静かさよ牡丹の花片地を染めてゆく

補助輪を取りたる幼の自転車が葉桜の道よろよると行く

柿若葉輝く木ぎの間から雉の一声聞こえて五月

茶髪なる青年の押す車椅子デイスリーブスの明るさがゆく

夏休みの孫の被りた麦わら帽被りて吾はひとり畑打つ

時は流るる

大阪 伊藤忠男

麻醉さめ時を飛び越し一瞬の時も長きと今聞かされる

風船に頬あて返す力あり押せば破れるはかなき力

入院を楽しむ心伝えても素直に聞ける今ではなきや

取り乱す人ではないと言ひ聞かす不安なるとも時は過ぎて行く

平静を保つ我慢は難しきその身の不安ほんのひと時

人生は楽しみ数えて過ぎす日々辛さ苦しみ過去のことなり

西風に気圧の谷が近づくか微かに見える雨雲の影

新緑の香る山道熊野道雲雀鳴く声せせらぎに消ゆ

皮を剥くりリンゴの香り部屋の中漂う朝の幸せなとき

夢は夢夢は覚めると云えば云え夢は叶うて夢の夢なり

石南花

豊橋 胃 甲 節 子

南天を縛るビニール引つ張りてヒヨ鳥の雛何度も遊ぶ

雨後の庭草取りすれば情なや早くも呼吸苦しく喘ぐ

細葉石南花咲いてるとゆふ奥三河ああ懐しきピンクの石南花

お隣のエアコンの古き壁の穴抱卵か雀は忙しく出入りす

吾が庭に生まれし雛か山雀は庭の本草を伝ひて移動す

出雲大社へ参拝終へたる妹の珍らしく華やぐ嬉しき電話

姉妹にて笑ひて終る今日の電話楽しかったと告げて切りたり

家事の他の時間只管読書して萎ゆる心身元氣を得たり

早朝の雨戸を引けば一面に視界はなべて霞に包まるる

心弱くなりてはならず夏にむかひ頑張る心を強く持たねば

鯛来た

沼津 鈴木孝雄

海岸に伸びやかに咲きしトベラの花枝葉に触れず鼻近づける

静浦港5月連休に鯛来た竿上げる子らの歓声に沸く

何処からか花の香が漂いぬトベラそれとも夏みかんかな

生姜の芽諦めてたが顔を出し地上の光眩しく受ける

もんしろちよう子供の頃は風物詩今は野菜の大害虫

黄色い花取れたあとに小さな実大きく育てトマトに支柱

デイサービス支えられつつ歩く人歩けなくなった老母を想う

白ロムにシムカード挿入しやっど世間の流れに追いつく

老眼鏡まだ掛けないぞと強がりもスマホの文字に眼がかすみけり

街中に真っ紅に咲きしナデシコのこの花は元の桃色が良い

母の形見

春日井 清澤 範子

狭窄症の手術をしたる夫元氣樂しみなりと玉葱植うる

庭にある赤白混じりの八重椿を明るく照らし陽は沈みゆく

低気圧にちよつぱり寒さ残りゐて母の形見のセーターを着る

故郷の安曇野穂高は爛漫に八重の桜と桃の咲く頃

常づねとなれば神社参拝に遥かに飛行機通り行く昔

吾が庭に椿の若葉さわさわと五月の風は吹き通り行く

菜園の隅に紫らんは繁りゐて赤紫の花風にゆれるる

飛行機雲浮く空高く眺めつつ神前に進み柏手を打つ

汚れたる国旗を洗ひ漂白しアイロン掛けして祝日に備ふ

飛び石を置きたる庭の草を取る赤白混りの椿映えたり

愛らしく

新城 半田うめ子

愛らしく舞ひてゐるなり本宮の杉林の中白さぎ数羽

モロヘイヤ健康によきと友の言ひ吾も前畑にて作りて居りぬ

味のよくフジ給食のセンター食品ありがたく頂きし日あり

錠を開け玄関に入りぬ末子がとびつきてくるやさしき猫なり

慶華楼ケイカロウの中華料理味カのよく楽しみつつ時折り行きぬ

稻荷社イナリの数羽の鳩杉林の中より舞ひつつ楽しみて眺むる

にぎやかに馬の鳴き居り東方の杉林の中何あるならむ

新城の善福寺のボダイジュの花咲き居ると人の言ひつつ

右みぎの手のいたき時あり自転車を引きつつ買物出来て楽しき

夏場所

名古屋 近藤映子

我夫の顔見る時は変り無く帰宅後に尚気になりぬ

子供の日息子日帰りにて夫見舞ひ孫が出来たと

わが夫の血管注入口手術を明日控え落ち着かぬ吾

わが夫のバースデー五月十日に夫の手術日となる

この皐月十日過ぎれど朝夕の冷んや感の去り行かず

我夫のバースデーの手術は無事ほつとする血経管栄養始まる

わが夫の命の期限きまりたり見舞へば彼の目尻の涙を

物言えぬ我夫見舞う此の時をテレビを着けて夏場所を

我夫の転院真近かこのまゝ晴天続くを願ふ

あとわずか五月の晴れ日汗ばみぬ夫の転院明日に控えて

魔笛

豊橋 伊与田広子

ベルリンフィルサイモンラトル指揮魔笛夜の更くるもテレビに見入る
ウインフィル隣の席の老紳士演奏聞きつついびきかきをりし

八十を過ぐれば疲るる音楽会家にてDVD見るが良き

DVD見ればいつか眠りたり覚むれば音楽終りてをりぬ

同窓の一人暮しの人々は老人ホームに入りしと言ふ

思ひ出のつまりし土地にわれをりぬ老人ホームなど行きたくなき

わが名前伊与田広子と母教へし学校に上がるに名前書きて

大家さんの広子ちゃんと呼ばれをりし始めて知りし伊与田の名字

小学の一年生に並びたり手をつなぎしになつかしきかな

健康で長生きせむとわれ思ふ食事に関心つけ運動せむ

武者人形

東京 足立 晴代

過ぐる歳吾子と祝ひて武者人形今又こゝに飾れる嬉しさ

そよぐ風五月の空もさわやかに鯉も雄々しく舞い泳ぐなり

五月晴池畔のしようぶいろ増してさざ波よせておよぐおしどり

豊かなる恵うれしく春の日に咲き香りたる花のいろく

深き絆に結ばれし多くの人と交りて楽しく迎えし米寿のとしを

天高く真鯉緋鯉と夫々に競いおよぐや五月の空に

樹々の葉も淡き緑も色増して強き日ざしを待ち望むなり

芽ぶきたる樹々の緑に映える陽の飛び交う鳥の姿かわゆし

吹く風も柳の緑葉さわやかに来たりし春の訪れうれし

芝桜小さき花の集まりて広々続く敷きものゝ如く

教へ子よ

蒲郡 杉浦恵美子

相席の青年何と教へ子よ担任として最後の組の子

この子等を担任せし頃我が夫は病院に在り毎日通へり

時は去り後戻りなど出来ないが平成二十三年の刻印愛しむ

肉体は減べど夫の存在感我が内にあり大きく占めて

わが夫がこの世に在りしときよりも面影さやか我が内にあり

我が夫がこの世に在りしときよりは数倍想ふ深く深く想ふ

夫のメール消してしまひぬ一瞬にボタンひとつを押し間違へた

電子機器の削除のボタン無情なり瞬時に消えぬ三年間が

されど我思ふに夫との思ひ出は我が内にては消ゆることなし

かくて我昨日も今日も我が内の夫と過しぬもうじき二年

眼差し

豊川 平松 裕子

湯上りの鏡に映るわが顔に母の眼差しの重なりて見ゆ

父親似と言はれ来し我なり老いて今母にも似たるか父母の子なり

今日もまた鏡に映る我が顔に母の眼差しを探してゐたり

鏡の中の母に会はむと映し見る我が顔に今日母はゐまさぬ

母親に似てきたと言ふ弟の数年前の言葉うべなふ

貰い来しその日より名を忘れたり今庭に咲く青淡き花

わが庭に初めて咲きたる青色の淡きこの花名を忘れ果つ

五枚づつ揚げる五角形の油揚げの形はひとつひとつ違ひをり

一枚づつ手を掛け揚げる五角形の油揚げは我の宝の如し

五角形の油揚げを五枚づつ透明な袋に入れてラッピングする

スナック豌豆

豊川 山口千恵子

去年より生えゐる処ややひろげ尖り葉つやつや菖蒲は繁る

ポキポキとスナック豌豆の筋をとる気がかりなことまあ良しとしつつ

ハイタッチして少年は帰り行く手足長く背丈も伸びたり

ハイタッチ交はせる少年の掌よテニスの部活にはげみゐるらし

それぞれにわづかに異なる時を示す部屋に掛けあるわが家の時計

少しづつ時のずれつつ三個の時計正すこともせず日の過ぎてゆく

参道を被ふ木立にうす暗し神おはします神殿目指す

雨雫落つる木下の参道を登りて行きぬわくぐり神社

プーシキン美術館展見に行かむカレンダーの前に日付確かむる

うつとりと夢見るとき眼差しのジャンヌ・サマリーの肖像の前

据膳

豊川 小野可南子

エンドウの葉群を朝日に透かしみる莢実のみどりゆらゆら
とつとつと伝ひ歩める飛石を紫めぐらす立浪草よ

あなたと共に見上げし巨き桐今日入院の我が行く道に

逝きまして十年早く過ぎにけりなどかしきりにあなたを思ふ

目薬の差し方をまず稽古おずおず従ふこんなことにも

座りたるブルーの椅子はたちまちに手術台へと変化へんげしてゆく

オノカナコの確認幾度わたくしが私であると認めてメスが

据膳とはかく有難し手を合わす裸眼隻眼に箸ゆつくりと

済みました聞こえし瞬間新しき水晶体に見る真つ白天井

新しき水晶体に見し天井の真白の柀目脳裏に残る

竹林

豊川 夏目勝弘

この竹林手入れせしはいつならむ立ちたつ枯れ竹折れ重なるも

朽ち竹を押し上げ出でし筍を今宵の酒の友にと掘りぬ

無住寺となりし寺の竹林を運動がはりと手入れを始める

植物といへど竹幹いと硬しチエンソーの刃たちまち切れず

竹林の手入れに疲れ息入れる葉ずれの音の降りくる下に

竹林の六町歩余を計画せし長塚節に思ひをめぐらす

病床より母への長き手紙には傭人また農事の細細のこと

癒ゆるなき病にありて九反歩に竹根植付けと記実によりぬ

こと細かに記実される耕作手帖T P Pのなき時代なりき

竹林の手入に疲れ日の差さぬ静もりのなか静かに息する

鶯

横浜 阿部 淑子

裏山の木々伐採はゆきすぎると聞こえずなるか鶯の声
根つめて書類書き終ふ筆を置くいづこともなく鶯の声
朝靄のかかりし枝にて鶯の珠玉の声よわれ輪唱す
巢立ちゆき六十二年の教え子等次第次第に幼な顔浮ぶ
クラス会教え子達は口々に言ひ合ひてゐる良きあの時代を

螢ぶくろ

東京 富岡 和子

半世紀を支えくれたり親友ともの逝く螢ぶくろと虚しさわかつ
涼やかにベランダ濡らす初夏の雨香りの主のゆずの花咲く
けふる雨傘傘通る下校時部活らしきの用具をぬらし
冠木門くぐるとそこはアヤメ原疎開地畦にわが身戻りし
万緑にカキツバタ咲く池の畔東京都立石神井公園

吉祥山

豊川 白井信昭

彩りにわれ浸りをり咲き溢るるつつじの花の逆光のなか

養魚場の水車の回る音のして排水口に寄りこよ鯉よ

朝の日は吉祥山の上に来て犬と散歩の清しさのとき

竹島に真向かい架かる長き橋海よりの風に吹かれてゆきぬ

夕暮れの町

「招待」 秋山逸穂

威嚇されすごすご逃げる黒猫に嘴太からすとどめのひと吠え

堀水に朝焼け空が写りこみ白鳥のつがい岸より離るる

雨やみて薄雲たなびく春の空散るはなびらがおもたげに見ゆ

アスファルトに描かれている落書きの円うすれおり夕暮れの町

人通りの流れに添いて歩みゆく観劇あとの興奮を秘め

贈呈誌

明治神宮春の大祭奉祝 明治記念総合短歌大会作品
小・中・高生秀逸作

青森アララギ 第三百八十七号 木浪 みつゑ

夕映えの空に啼きつつ白鳥の遠のく群を長く見てをり

愛媛アララギ 六月号 山崎 タマリ

大気澄み吐く息白き朝明けをイソヒヨドリの澄みし声ひびきぬ

鹿児島アララギ 五月号 中山 タマエ

なべ鶴等白き頭をくねらせてゆつくり歩く荒崎の田圃

高知アララギ 五月号 結城 多良子

近く来て鳴く山鳩の親しかり姿見えねど声の太かり

冬雷 六月号 高松 ヒサ

我が家の東は広い麦畑緑の上をつばめ飛び交う

柀 六月号 島田 千穂子

日の差せば田の畦草もかがやきてカササギの尾羽根むらさきに照る

群山 五月号 青沼 政子

電柱の上にとまりて鳴く鳶をしばし目守りぬ冬晴れの朝

檜の木 五月号 漆畑 八江子

野菜作る我が為夫の買ひありし防鳥網を棚より見出でぬ

穂の原 四月号 田中 浄子

葉脈の太くなりたるキャベツ畑紋白蝶の飛び立つを見る

小一 岩 本来人

こまつなをシャキシャキとたべてみるやさいの音はおいしい音だ

小二 加賀 維奈

さらさらの雪にかんげきとびこんだ雪がうれしさの型

小三 宮 木理 絵

来年はどんなさくらにさこうかとさくら木思い冬仕たく

小四 内村 明子

百センチこんどはとべた左足マットに落ちて見えた青空

小五 高橋 未夢生

夏の富士手ごわい相手そびえたつ三度目ちようせい頂へ

小六 宮 木秀 隆

祖父の乗るタイヤの減こみし自転車に空気がいっぱい父と入れ置く

中一 嶋田 君晴

けんかして今日の天気は快晴で雲一つない不機嫌な風

中二 金子 愛実

肉焼いてビール片手に父の汗休み返上家族のために

中三 兵庫 鮎美

空高く最後のサーブ打ち上げるゲームセットで今夏終わる

高一 川田 将司

枯れた木に一枚だけの緑の葉たとえ枯れても生きつづけている

高二 本間 千明

聞き慣れた祖母から移る安房なまり自然にこぼれふんわり響く

『いじよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

弟が庭に造りし鹿威その音けふはしみじみ聴きをり

三田美奈子

軽トラにて行商に来る君は魚屋けふは買ひたり初物の鳥貝

稲吉友江

帰り来れば玄関のわが忘れな草花花ゆれをり淡きみどりの

鈴木美耶子

わが夫は日々発見とわれに言ふ亡き父の定年後あとの無かりしにか

吉見幸子

またもやか爆発の映像流れたりポストンマラソンのゴールのときぞ

牧原正枝

道草をしつつ帰るらし学童ら弾んだ声が今日も聞こえる

岩瀬信子

数かずの本を遺せし夫の本けふも静かに書架に並びゐる

石田文子

夕暮れの茜に染まる西空を宇宙ステーションの音なく去りゆく

山崎俊子

思春期に衝撃受けたる「ボニーとクライド」茶の間に今は長閑に見てをり

水野絹子

わが家にも「めだかの学校」始めたり夫と孫らのがやがやの中

牧原規恵

男なら男らしくと書きやらむ独り住まひの青年の孫に

岡本八千代

必ずやわれに明日あしたが来ることを信じつつ今夜も眠らむとする

寝る前の祈りに祈る東京のおまへの吉報ただに待ち待つ

『俳句』

飛行雲追ひかけて旅夏きざす

植村公女

故郷の葬に連なり青嵐

大空のずり落ちてきし藤の花

生きるとは虫に問ひたし山繁る

一石

青羊歯（シダ）や億年続く生命（いのち）かな

一滴（しずく）そこにミクロの世界あり

寺の瓦一枚づつ光り仏生会

喜仙

木のベンチ弁当ひらく残花かな

いづこから運びし土や燕の巢

梅雨空の気まぐれにして降り曇り

皓一

薔薇園は女王女神ばかりなり

白花も匂ひも良けれ十葉草

私の一首

新しき年を迎へて振り返る人生いろいろ夢もいろいろ

青木玉枝

卒寿という目出度い新春をこの山里に迎え、故里の初詣知人友人と楽しき語らいもなく、私はなんの為にこの年まで生きてきたのかしらむなしさと淋しさ、これが私に与えられた運命と心に念じ、一月下旬姉も逝き姉の家での独居は本当に生き越し人生を考える日々。古里蒲郡をどうして出たのか海釣りの竹島橋をこの杖で歩いて見たい時世の流れを感じます。

冴えかへる冷たき水の春の水外の井戸水水色淡し

岡本八千代

この歌、今年の春の新しい水、その流れ、その光り、その水色に美しさを感じたので歌にしてみた。「さえかへる」は、立春を過ぎてから、また寒さがきびしくもどつてきて、水は冷たかったのでこの言葉を使った。

葱を洗うとき、外の井戸水の流れを受けつつ洗った。春の日の中で注がれる水は、淡い水色の光りとなって光りつつ私の両手に注がれてくる。今年の春の水に、私の何かポジティブな心が動いたのかもしれない。

「歴代天皇御製歌」(十三)

貫名海屋資料館

『天智天皇』 第三十八代 在位六六一年―六七一年

天智天皇は、第三十四代舒明天皇(皇極・齊明天皇の夫君であられた)の第二皇子。百済救援は完敗し、半島における方策は挫折する。朝廷の政治の関心は、内政中心へと移行することになる。

君が目の恋しきからに泊^ほてて居てかくや恋ひむも君が目を欲^ほり(日本書紀、第二十六)

あなたの面影が恋しいばかり。舟を泊め、もう一度お会いしたい。

香具山は 畝火を愛しと 耳梨と あひあらしひき 神代より かくなるらし いにしへも 然なれこそ うつせみも 妻を あらしふらしき

香具山の神は畝傍山の神を愛しく思い、耳成山と争った。神代から恋の争のあったらしい。

香具山と耳梨山とあひし時立ち見に来し印南^{いなみ}国原 (万葉集 卷一)

香具山と耳成との恋争いを 出雲の神がここまで様子を見にきた。

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜まさやかにこそ

大海原の上の豊旗雲に、今沈む日が射している。今夜はさやかな月夜になるだろう。

ある自然科学者の手記 (14) 大橋望彦

平成25年4月29日記

『デ・プライド』②

定年退職をして、それまで専攻してきた学問から離れ、
扱、第二の人生を歩み出そうという時に、このプライド
の切り替えが始まった。それまでに何時とはなく身につ
いてしまったプライドのような意識を取り除き、新しい
気持ちで人生のやり直しを議論むとした時に、どうすれ
ばそれまでのプライドを取り除くことが出来るのかを考
えてしまう。一番手っ取り早いのは、まずはそれまでの
肩書きを取り外すことであろう。そして、自らその生活
環境を替える事から始めなくてはならない。自分が飛び
込む世界を新たに決めるのであるから、可成の勇気も必
要である。それでもその切り替えが出来たときには、半
分以上のプライド脱出に成功している。然し、それでも
プライドと言うやつは、人間に付き纏うもので、仲々抜

け切れないで存在しているものである。でも、そうなっ
た時に残っているプライドを必ずしも捨てることもない
のではないかと反省もしてみる。人間其処まで洒脱出来
るものではないと思ってみる。その様な妥協をすると気
が楽になる。これらのことは自分でやってみて気が付い
た。それまで、研究三昧に身を置き、自分の想ったこと
の証明に明け暮れし、我儘わがままのし放題に生活してきたこと
を離れて、教鞭を執つて見たものの、窮屈な生活で、自
分の第二の人生はこれではないと見切りを早くも付け
た。然し、唯、考えていたのでは先に一向に進まない。
その頃、独り身となり、いつそ、里山暮らしをしたなら
ば、第二の人生も変わるであろうと察知した。それが奥
多摩暮らしの始まりである。

ポツンと放り出されたような生活が始まった。するこ
とは皆無どしか云い様がない。総て白紙状態である。こ
の時にプライドは未だ残っていた。今迄にやってきた
ことで何か役に立つようなことはないであろうか?と、
考えること事態、未だプライドがこびり付いていたので

ある。住まいの近所に『釣り堀』があり、そこに毎日通うことにした。一つには、奥多摩の人間になるのには、其処に住んでいる人達を知ることが先決であろうと思っただからで、『釣り堀』で世間話をしていると次第に色々なことが判ってきたこともあった。二年間、ボヤーと釣り糸を垂らし、一方では、客の釣った魚を捌いたり、焼くのを手伝いながら過した。その頃、懇意となった隣人の絵描きさん（創美会と言う絵画集団の会長さんで、カナダ国から勲章を授かった偉い画伯）と色々な話をしている間に、何かの折に見せられた木彫りの鹿のループタイが妙に気に入った。こういうのを作るのもいいなあ・・・。もともと小学生の時から、国語とか数学が嫌いで、理科と図工の成績だけは良い点を取っていたりしたので、これが切っ掛けとなり、素直に木彫りという仕事に取り掛かった。それから十数年、飽きもせず、鹿だけをテーマにして木彫に励んできました。あつという間に感じられるが、これで、すっかり前のプライドを傷つけることもなく、卒業してしまっただ。いまや、奥

多摩では、髭を生やした一風変わった鹿の木彫りのお爺さん（時として先生）と言うことで通用しているようである。未だ、先生と言う人は、先の肩書きに博士と言うのが付いていたことを知っている人が言い出した言葉であり、別に今の仕事とは無関係なことではある。

このようにプライドを脱したことを書いていて、ふと気が付いた。プライドと言う意識は、可成高度に分化（differentiation）した機能である。その様な機能から逸脱することが出来るのはプログラムの書き直し（re-programming）に相当することだ、脱分化（de-differentiation）に他ならない。これは発ガン機構とも関連することではあるが、この機構こそ、先のノーベル賞を受賞した山中京大教授の発見したiPS細胞の作成過程に等しい。そうすると、脱プライド（depride・デ・プライド）なる言葉が出来てしまうかもしれない。勿論、細胞の世界にプライドなるものがあるならばの話であるが・・・。

今、目が覚めた。やはりウトウトしていたらしく、こんな考え方の夢を見ていたみたいである。

絹の話 (32)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

野蚕絹のインチキ販売

絹といえば、白い繭から作られると思っている人が殆どです。ところが昔から着物の裏地等に繭紬といって中国東北部（瀋陽中心）で採れる柞蚕（サクサン）と云う薄茶色をした野蚕繭から作った布が使われていた事はあまり知られていません。シャンタン等も同様です。

また日本では海彦山彦の神代の時代からクヌギやブナ等の広葉樹林に棲息する天蚕（テンサン）と云われる野蚕繭から釣り糸を作ったり、山へ芝刈りに行ったついでに集めた繭を紬いで織物にして来ましました。

野蚕絹は世界中で古くから、その地域の民間利用品で、あくまでマイナー素材でした。

日本では戦後の経済成長と共に昭和30年〜40年を過ぎ着物販売ブームが収束して来ると共に、飽食の時代を迎え、趣味、趣向、珍しい物、有名作家物等が注目を集める様になって来ました。野蚕絹もその一つでしょうか？天蚕は絹の女王と言われ、和服として非常に高価な物になっていきます。

昨今では、生産者側も消費側も簡便な化学繊維中心の洋服が日常生活で、絹の事などすっかり忘れられてしまっています。デパート等で絹100%の品を見付ける事は非常に困難です。ところが何か自分だけは他人が持っていない特別な物を望む富裕層が増加して来て、絹や織物の知識が殆ど無いにも関わらずとんでもない価格で野蚕絹を買い求める人が出て来ました。

例(1)

私の売り場の野蚕絹のシヨールを見て、どうしてこんなに安いのかと聞く人がありました。自分は和装屋で、与那国蚕で織られたシヨールを桐箱入りで40万円で求めて来たと言うのです。どうしてそんなに高価なのか訪ねた所、与那国で手織りした物だから高くなったのだと説明されたそうです。

与那国蚕はアタカス蚕と云われ、インドネシア、タイ等熱帯地方に広く分布しアボガドやキャシュナツツの葉を食い荒らす害虫で、日本野蚕学会指導で20年少し前から産業化利用がインドネシアで始り、ジョクジャカルタの王妃様出資会社でシヨール等生産されていますが、与那国はアタカス蚕は世界の北限棲息地域で、県の天然記

念物に指定されていて、与那国島でアタカス蚕の織物を作った報告は聞いておりません。沖縄県の工芸センターが20年以上前、島の産業振興にならないかと試し織りした事が一度ありますが、その後そのような事聞いておりません。

ありもしない嘘で固めた様な話をして、法外価格には驚きました。

実は売る側もアタカス蚕が何たるか良くわからないまま入れ知恵されて販売しているのだらうと思われませんが、振り込め詐欺と何処か似ている所がある様な気がしてなりません。

例(2)

私が有名デパートで野蚕シルクの販売をしている時、中央官庁を定年退職したと云う男性が高額なトカラ織りを買ったと言って自慢するのです。

私は耳を疑いました、「トカラとは奄美の手前の吐噶喇列島の事ですか」と聞き直すと、そう聞いていると言うのです。今日迄40年弱繊維関係の仕事をして来て、トカラ織りなど聞いた事がありません。私は吐噶喇列島には40年近く行き来して来て、7つの有人島の内1島以外

は全て足を運んでいて、村長等と島興し対策など繰り返して協議して来ましたが、見聞しておりません。

その元高官の話を総合するとインドネシアのスンバ島の緋織かと思われれます。アンチーク以外そんなに高い物ではありません。

誰も知らない様な離島の名を語って詐欺まがいの商売に腹立たしさを覚えます。

△絹見分け器の開発▽

野蚕絹の見分けはなかなか難しい、商売仲間でも間違った野蚕名を付けて展示しているし、シルク博物館でも誤説明の展示をしている事が有ります。

現在日本で一般に流通している野蚕は7種類ですが、野蚕は繭の種類によって価格が天地ほど違いますので、どうしても正確に見分けなければなりません。今後、10万種以上と云われる絹を作る生物の有効利用が増加して来ますと益々混乱する恐れが有ります。

それぞれの野蚕絹は糸の形、多孔質等の構造、アミノサン組成等の差異に依り光の波長への僅かな反応の違いを利用したルーペの様な物が出来ないか研究中です。

物理学者と詩歌の世界 (42)

一石

ジョージ・スムート

ジョージ・F・スムート (George F. Smoot, 1945-) は米国の宇宙物理学者。フロリダ州生まれ。理科の教師であった両親やアーサー・C・クラークのSF小説の影響で科学に興味を持ち、科学者への道を志した。マサチューセッツ工科大学で数学と物理学を学んで1966年に両方の学士号を取得し、1970年には素粒子物理学の研究で物理学の博士号を取得した。スムートは宇宙背景放射の「ゆらぎ」を見つけるための観測衛星打ち上げをNASAに提案。ジョン・マザー (注1) とともに人工衛星COBE (宇宙背景放射探査機) の開発と観測に携わった。2006年、スムートは「宇宙マイクロ波背景放射の異方性の発見」やCOBEでの観測によりビッグバン理論を具体化した業績でマザーとともにノーベル物理学賞を受賞した (参考資料1)。

スムートは、1994年からカリフォルニア大学バークレー校の教授。2008年、韓国・梨花女子大学校に新設された「初期宇宙研究所」の初代所長に就任した。

スムートとマザーの業績を理解するには、現代の宇宙論の根幹をなすビッグバン理論、宇宙マイクロ波背景放

射やCOBEについて知る必要がある。以下は、その解説である。

1929年、エドウィン・ハッブル (参考資料2) は遠方の銀河の観測により宇宙は膨張していることを発見した。宇宙の膨張は、過去に遡るに従って宇宙は小さかったことを意味する。このような考えから、理論物理学者ジョージ・ガモフ (参考資料3) は1946年「火の玉宇宙論」を提唱した。宇宙は超高温、超高密度の状態からビッグバンにより誕生したという説である。彼はこの説の中で次のような予言もした。すなわち、誕生時に灼熱であった宇宙は高エネルギーの光で満たされていた。しばらくの間、光子は電子と衝突し合って直進できない時代があったが、誕生から38万年たった頃には宇宙が冷えてきて、素粒子から水素原子がつくられて光が直進できるようになる (「宇宙の晴れ上がり」)。その光は、その後の宇宙の膨張によって波長が引き伸ばされ、マイクロ波となつて現在も宇宙に漂っているはずである。このような「原初の光の残光」は宇宙の「背景放射」と呼ばれるようになった。ガモフはその温度を5Kと推測した。「背景放射」は1964年、米国立研究所において電波望遠鏡の雑音を測定していたA・ペンジアスとR・ウィルソンによって天の川銀河外のあらゆる方向からやってくる電波 (マイクロ波) として偶然に発見される。彼らが観測した「残光」の温度はガモフの予言にかなり

近い3・5Kであった。この発見はビッグバン宇宙論を裏付ける証拠と見なされるようになり、「背景放射」観測と研究は宇宙論における最重要課題となったのである（ペンジアスとウィルソンは1978年ノーベル物理学賞を受賞）。

その後、D・ウィルキンソンによって70年代の各種観測データが総合的に解析され、「残光」の温度は 2.72 ± 0.08 Kと精度が上げられたが、いずれのデータも大気の影響を受ける地上での観測に基づくものであった。そこで宇宙空間での直接的な観測・研究が期待されるようになる。こうして、大気外での精密測定を目的に1989年、スミートやマザーらの尽力によりNASAによりCOBE衛星が打ち上げられた。この観測で、「残光」の温度として 2.725 ± 0.002 Kが得られると共に（誕生後38万年の宇宙の）「残光」の全天マップも描き出された。「背景放射」は非等方で、場所によって温度が10万分の1度単位で違っていた。「背景放射のゆらぎ」として知られるこの現象は、生まれたての宇宙がすでに不均質であった証拠である。「ゆらぎ」はのちに物質の濃淡を作り出し、そこから宇宙の大規模構造、銀河、恒星、さらに私たちが作り出されたのだ。

COBEによる観測開始からわずか9分で、背景放射のデータを示すグラフが学会で紹介されと会場は大きな興奮と感動につつまれた。このときから「宇宙論は思索

に基づくものではなくなり、科学となった」。そして「ついに、理論を秤にかけることができるようになった」（スミート）。その後、観測衛星WMAPなどがCOBEを継ぎ、宇宙論の新たな発見と進展が続いている。

注1…ジョン・クロムウェル・マザー（John Cromwell Mather 1946―）は米国の宇宙物理学者。

1974年カリフォルニア大学バークレー校で博士（物理学）。1974〜76年コロンビア大学ゴダード宇宙科学研究所でCOBEの開発、推進し、1000人以上の研究者、技術者などの大規模なチームを統括した。マザーはメリーランド州のNASAゴダード宇宙飛行センターの上級天体物理学者で、メリーランド大学の教授である（参考資料4）。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia
- 2) 三河アララギ、第60巻、第2号、P 42
- 3) 三河アララギ、第59巻、第2号、P 40
- 4) Wikipedia, the free encyclopedia

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十 五味保義

五味保義は大正十二年のアララギ入会以前から島木赤彦の指導を受けていたが、赤彦没後は土屋文明に師事した。太平洋戦争中休刊していた「アララギ」が復刊されるとその編集を担当した。

顔一面汗噴きて励み給ひしに彼の夜の君はわれを励ます
昭和二十八年『一つ石』

近く居て吾は聞きにき助詞一つ苦しみ考ふる君が息づき

二人のみゆきて浴みたる磯の湯にたふさぎ洗ふ君をまもりき

まぼろしは夜々そこに顕つと言ひ指し給ひしより一年のみ命

土屋君と呼びしやさしきみ声はや今のうつつに恋ひ思ふなり

「白桃」をよみゆきて昭和九年の頃涙とどまらぬ一首二首あり

或タペ林泉にひそみし石の如き君見し悲しみのよみ

がへるなり

題は「悼斎藤茂吉先生」である。一首目から三首目までは、「アララギ」の原稿整理のために茂吉と二人だけで行った熱海の温泉宿を舞台にしている。作者は自著『アララギの人々』にこのときの「こまを、「昼食後入湯。先生は御自分の越中禪を湯室に持込んで丁寧にはれた」「洗つた禪を先生は絞つて……カーテンの引手の真鍮にかけられる」「五月三日、朝おそく入湯、朝食。あつい味噌汁でなくては不可であることを知つてゐたので、女中に「こんろを二階の縁に運ばせ、眼の前で煮た」「食後、先生の床を六畳に移し、又臥床。午近く起きて、『食吉小話』の原稿に手入れをされた」等と書いてゐる。茂吉の日記には、「五味保義君朝七時半に迎二来り、……熱海二来り」（昭和二十四年五月二日）、「午前中臥床、茂吉小話補入、……五味君ノ歌ヲ聴く、旨イ」（同三日）等とある。

四首目に歌われている内容は茂吉が歿する一年前のことであるという。すると、茂吉の日記に「五味（3、4月号二首ワタシ）」とある昭和二十七年一月二十四日のことであろうか。もう、二首しか作れないほどに衰えて、前年には「おぼろなるわれの意識を悲しみぬあかつきがたの地震ふるふころ」と詠む状態だったのである。因みに歌集『つきかげ』に残された昭和二十七年の作品は

十二首だけであり、歿する二十八年は零である。

六首目に詠まれた歌集『白桃』は精神的負傷を背景にした沈痛な歌を多く収めている。作者は茂吉の「人いとふ心となりて雪の峡流れて出づる水をむすびつ」「山のうへの氷のごとく寂しめばこの世過ぎなむわがゆくへ見ず」「過ぎ来つる五十二年をうたかたの浮びしごとくおもふことあり」といったような悲痛な境涯に心を打たれているのである。

七首目も、六首目に読み取れる茂吉の沈痛な心を思う歌である。作者は、『アララギの人々』に「林泉の隈」という一章を設け、その書き出しに「明治神宮内苑の芝は枯れわたつてゐた。……私はふと向うの林のくらがりから、一人の紳士が歩み出して来るのを見た。斎藤茂吉先生である。例の黒い外套を着て、帽子は脱いで手に持った姿勢で歩いて来られる。ちつとうつむいたまま、ずんずんこちらに近づいて来られるのだが、私たちには気づかれない様子だ。私は立上がつて凝視した。実に寂しい、静かな先生を見た。」と書いている。

蔵王山より引く走井のひびきゆく君が生れしその家の前

沙羅双樹の花の散りしく木下ゆき石光り立つ先生の墓

天つ日はふりそそぎつつ君が墓に迫る瓜畑いぎれ立

つなり

双眼鏡の中にあきらけき蔵王山君が碑小さく見ゆるこほしさ

題は「金瓶」である。作者は『アララギの人々』の中で、「昭和二十八年七月、アララギ斎藤茂吉追悼号の用件で、私は山形の上ノ山と金瓶を訪ねて」と述べている。

浅岸に寄る藻の花の白き見つここに寂しく在り経けむ君

椋鳥は梨の高木に來り去り「聴禽書屋」人音のせぬ桂の青葉ちり来る下かげも恋しかりけり遠く來ぬれば

しぬびつつ吾の來しかば流らふるしぐれに暗きデルタの黄葉

作者は金瓶を訪ねたついでに大石田をも訪ねて、右の四首を作っている。聴禽書屋や庭の桂の木のこととは昭和四十七年に訪れた佐藤佐太郎も詠んでいる。ただしこのときは桂の木がなくなっていることを詠んだ。四首目の「デルタ」を茂吉は『白き山』で「月の夜の川瀬のおとの聞こえるデルタあたりにさ霧しろしも」など九首に詠み込んでいるのであり、当然、作者はこれを偲んでいるのである。

楽しい時間 8

山本紀久雄

2013年5月31日

「いーとびあ」の「辻照子先生の料理とマナー」教室参加は2カ月ぶり。京浜東北線の蕨駅ホームに着いた時、足元が軽いと気づく。西口階段を降りながら、調子を出し過ぎてここから転落すると、教室メンバーから笑われるし、もう歳だから気をつけなければいけないと思いつつも、一方では、靴の底が軽々と階段を弾むように動いていく自分に「まだ、いける!!」と自己暗示かけ、今日の辻先生メニューは何かと思いめぐらし、自分は意外に料理づくりに興味があるのかなあ・・・などと自己分析を楽しんでいると、もう「いーとびあ」ビルの前である。フロントは明るい。外の陽光が広く奥まで入ってくる設計で、「こんにちは」とかけてくる声が今日は特に心地好い。いつも気持ち良い応対をしてくれているので当たり前前ではあるが・・・靴をスリッパに履き替え頭を上げると、窓の向こうに広々とした調理スペースが見渡せる。そうか、この広がりもやわらかさと明るさをもたらししているのかと思いつつ、先日、建てなおした「さいたま市・領家公民館」を見学した際に感じた「窮屈な料理教室スペース」を思い起こし、その差に「いーとびあ」を改めて評価し直す。

今日のテーマは「日本酒をオンザテーブルでおしゃれに」で、「和」がテーマで、マナー教室は「箸の使い方」

白板には箸の悪い使い方事例が辻先生直筆で書いてある。

「探り」「迷い」「ねぶり」「寄せ」「刺し」「押し込み」「空「移し」。最後に「箸」を付け加えると悪い事例となる。

辻教室は若い人が多いから、このような基本的な教養マナーは必要だし、重要だと思いつつ、年配者もつい悪い事例として挙げられた箸使いを日常しているのではないかと、反省のヒントにもなるだろう。

さて、今日辻教室の料理メニューは三品。

① 鮭のオイスター蒸し

② 山菜のおこわ

③ 鶏のボン酢かけ

辻先生の実演後に調理に入るが、今日は4テーブル各6人という大盛況だ。この満員環境では自分が手出しする必要はないし、本日はみどり監督が欠席のため指示してくれる人もいないので、積極的に「洗い場担当」と定める。すべての行動を「戦略・戦術」を明確にしながら行うことを「生き方ポリシー」としているので、今日は洗いに徹する。

調理器具と道具を洗いながら、再び自分を見つめ直す。今日は洗い専門だが、長い間、辻先生に指導いただいているので、昔の自分とは変わっている。調理を嫌がらなくなつた。細かい、微妙な料理は難しいが、一応のことは出来るようになった。

そういえば先週の日曜日、今、一緒に仕事しているアメリカ人女性と、ご主人と娘さんの三人を自宅の昼食に招待した際も、家内と一緒にスーパードで買い物し、料理

つくりの手伝いをしたが、事前にメニューをどうするか二人で考えた。

アメリカ人女性の好みは、時折一緒にする食事から大體推測できる。ご主人はアメリカ企業の日本代表職、普段のつき合いで多彩な日本食を食べているだろう。問題は娘さんだ。まだ14歳の中学生、インターナショナル学校に通っているから、あまり日本食は食べていないかもしれない。とするとこの娘さんに合うものにはしたいが、子供が好むピザなどでは日本の家庭料理とならない。親は子供が喜ぶと嬉しいものだ。だから娘さんが興味持ち、美味しいと言ってくれるような料理をしようとした。この「戦略」に基づきつくったのが次のメニューである。

- ① 混ぜご飯。酢飯にズッキーニ、シイタケ、ニンジン、サヤ、アゲを混ぜる
- ② サラダはレタス・タマネギ・パプリカに豚しゃぶを乗せ、ドレッシングはゴマとレモンとマヨネーズ混ぜ
- ③ 鶏肉のから揚げ
- ④ 豆腐とひじきのしらす和え
- ⑤ 大豆の鶏肉もどきのから揚げ
- ⑥ キュウリの塩もみ
- ⑦ ぬか漬
- ⑧ 食後に近所の友人がつくってくれたロールケーキ
- ⑨ コーヒー
- ⑩ お茶とオレンジジュース

ところで、欧米では初めての客に家の中を案内するのがルール。今まで訪問した欧米各地でも家の中を見させ

てくれた。このルールの源には理由があるが、それを語ると長くなるのでいつかの機会としたいが、案内した中で、娘さんが好奇心を示したのは仏壇であった。そこで仏壇の前で「お参り」をして見せたところ、娘さんが実際に鐘を「チーン」と鳴らして手を合わせる。宗教が違うのにいいのかなあ・・・と思ひ、親を見ると笑ってうなずく。

食事になって、娘さんがテーブルに並んだ料理から、最初に取り皿へと選んだのは「サラダ」。次は「鶏肉のから揚げ」、その次は「キュウリの塩もみ」。美味しいとニコツとしながら、次に「大豆の鶏肉もどきのから揚げ」については怖れげに「迷い箸」である。「これは何ですか」と聞いてくるので「食べてごらん」と一口、「これは美味しい。何だろう」と関心持って聞いてくる。

混ぜご飯をお代りしたあたりから「ぬか漬け」について関心を示し、どうやって漬けているのか聞くので、洗面所の片隅に置いた「ぬか漬け甕」まで案内すると、中まで手を入れ、においも嗅いで「ふーん」とうなずき、テーブルに戻ってぬか漬けを箸の先でつかみ、しげしげ見ながら食べ、再びニコツとする。

数日後、アメリカ人女性からお礼のメールが届いた。「娘が一番喜んでいました。料理も美味しかったと言っています。いろいろな日本の作法も体験してよかったです。」と。料理が出来なかつた自分が、少しでも家内の手伝いができ、娘さんが喜ぶという楽しい時間を過ごせたのは「いーとぴあ」と「辻照子先生」のおかげ。感謝している次第。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (12)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書

第一回の「歌よみに与ふる書」は、明治三十一年二月十二日に新聞「日本」に掲載された。当論は全編を通して、世間の歌論、あるいは手紙に答える文体をとっている。

第一回の主な論点は以下の項目の通りである。

① 近來歌壇の低調認識

② 万葉集への回帰

③ 源実朝讚美

では各項目を見ていく。

① 近來歌壇の低調認識

「仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候^{もうさず}。正直に申し候へば万葉以來実朝以來一向に振ひ不申候」と、どの様に低調なのかを具体的に論じている。

② 万葉集への回帰

江戸中期の国学者、歌人であった賀茂真淵に言及しつつ論じている。真淵は古代歌調の復活に力をそそぎ、特に

「万葉集」の研究にめざましい業績を残し、万葉調歌人として一般的には評価されている。

子規によると、真淵が実朝をほめ万葉を崇拜した点は当時にあつては実にえらいのであるが、子規から見るとまだ足らないところが多く、真淵の歌集を見ても万葉調は一向に見当たらないと厳しく批判。それにより万葉集の崇高性を高めている。

③ 源実朝讚美

実朝はその歌がただ器用というのではなく、力量あり、見識あり、威勢ありで時流に染らず世間に媚びないところが良く、人間としても立派な見識ある人物であると論じている。

更に実朝は三十歳にもならないうちにあえない最期を遂げたが、あと十年も生きていたらどんなにか名歌を沢山詠み残したであろうと、その早逝を悼んでおり、古今集や新古今集の模倣をせず「自己の本領屹然として山岳と高きを争ひ、日月と光を競ふ」第一流の歌人であるとその才能を称賛している。

連載の初日は、子規の短歌に対する本質的考え方を述べているが、第二回以降は歌論を具体的に展開している。

「鍼の如く」 其の三 夏目勝弘

(六月九日より七月七日)

六月五日上京七日平福百穂らに送られ東京を發つ

〔詞書〕六月九日夜、下関の港にて

○うつら／＼髪を刈らせて眠り居る足をつれなく蚊の螫しにけり

〔詞書〕四日間の旅を経て十日といふに博多につく、十一日朝、千代の松原をありく

○夏帽の堅きが鏝おびに落ちふれて松葉は散りぬこのしづげきに
(自分が歩いた松原が、節の歩いたところではないが「このしづげきに」状況は同じであるが、思ひは天地の違いがある)

〔詞書〕十二日
○蚊の螫し、足を足もてさすりつゝ、あらぬことなどおもひつゞけし

〔詞書〕病室みな塞りたれば入院もなり難く、久保博士の心づくし暫くは空くして雨にぬれて通ふ

○すみややく人も癒えよと待つ時に夾竹桃は綻びにけり

〔詞書〕廿日、漸くいぶせき旅宿をいで、病室の一室に入る、二日三日の程にくさぐさ聞き知りて馴れ行く(以下略)
この日母への手紙に：単独の一室故大層の繰合に有之候、のみならず官費に致しくれ候こと、て博士の厚意は感謝の外無之候(以下略)

〔詞書〕廿四日夜、また不眠に陥る

○いづべゆか雨洩りたゆく聞え来てふけしく夜は沈みけるかも
〔詞書〕小松植多たる狭き庭をへだて、外科の病棟あり、痛し／＼といふかなしき呻きの聲ささゆ

○夜もすがら訴へ泣く聲遠ぞきて明けづきぬらし雨衰へぬ
〔鍼の如く〕には雨が歌を作る切つ掛けになつたものが多いように思ふ)

〔詞書〕廿五日、ペコニヤの花一枝を挿し換ふ、博士の手折られけるなり、白き一輪挿は同夫人のこれもペコニヤの赤きを活けておくられけるなり、廿六日の朝看護婦の幘を外していけるあとにおもはぬ花一つ散り居たり

○ちるべくも見えなき花のペコニヤは幘の裾などふりにけらしも

○ペコニヤの白きが一つ落ちにけり土に流れて涼しき朝を
〔詞書〕七月一日、朝まだきにはじめて草履はきておりたつ、構内に稍ひろき松林あり、近く海をのぞむ

○月見草萎まぬ程と蛙鳴く聲をたつねて松の木の間
〔詞書〕四日深更、月すさまじく冴えたり

○硝子戸を透して幘に月さしぬあはれといひて起きてみにけり
○さや／＼に幘の殺げばゆるやかに月の光はゆれて涼しも
〔詞書〕目ざめてさまさまのこと思ふ

○かゝるとき扁蒲畑ひんぽうに立ちなばとおもひてもみつ今は外に出です

〔詞書〕七日
○よひ／＼に必ずゆがむ白蚊帳に心落ちゐて眠るこのごろ
○白蚊帳に夾竹桃を思ひよせ只快くその夜ねむりき
〔詞書〕厭はしきは幘の中の蚊なり

○はかなくもよひ／＼毎に蚊の居らぬ幘なれかしとおもひ乞ひのむ
(蚊帳のなかに、いつのまにか蚊が入っている、朝血にふくれた蚊を殺したことを思い出す)

「氷魚」のことから (150) 岡本八千代

いつのまにか「氷魚」の稿も150回となる。「三河アララギ」のお陰である。恰も三河アララギ60周年の7月号の稿として、感謝のほかはない。

庭には、御津先生からいたゞいた黄素聲の花が初夏の風の
中ゆれている。その頃の先生の歌一首…。(昭和43年「黄素聲の門」)

ののしりつつ思ひつきたる一つ言葉わがいふけふの「く
りこみ理論」

あの頃、先生が「歌づくりにも朝永振一郎博士の「くりこみ理論」のように、自分の独創性を一首の中にくりこんでゆけよ」と言われたことを思い出す。その一つ言葉よ。

ここよりは、子規小説「曼珠沙華」の続き

二。赤い西日の中で何やらしている一人の小娘をみつけた玉枝(主人公)は、その少女の後ろからそつとのぞいた。

・少女は、乞食でもあろうかと思うほど、継ぎくの汚ない着物、帯は片側に赤い唐縮緬をつけたのを縄のよれたように結んでいた。髪はたゞやたらに束ねていた。そして、そこらにある曼珠沙華をむしりとは余念なく糸で縛っていた。

・玉枝は「オイ」と呼びかけたが返事なし。

「この辺に昔の大将が討死したという塚があつて石が立

つているというがお前は知らんかと尋ねた。

・少女は次には桔梗の花束をこしらえていた。玉枝は自分の帽子にさしていた桔梗を放つてやつたら、はじめてにこつと少女は笑つた。——野原のできごと。——

三。山本村のできごと。

・祭—去年と一昨年とは赤痢がはやつたが、今年は祭があつた。

・蛇使いの男と二匹の蛇の芸。——二匹の蛇を男は首に巻いて見物人の前でいろいろ芸を見せる。男はまた一匹腹の帯にしていた蛇を扱つて、三匹と見せ物にした。

・桔梗の花束をもつた少女と蛇、蛇は少女をなぶっている。

—蛇男は、少女に、「なぜ城下で花を売つて来んか、くそ馬鹿」とどなつた。

・そこへ、一人の人が来て、みんな花を買つてくれた。——五錢で。

・蛇男は、少女のかごの底のお金もかき集めて、ふところへ入れて「徳という人が待つている」と言つて去つた。

四。花かごをさげた少女は、小川に沿つた道を歩いていると、一つの縞蛇がすると川を涉つて逃げるの見送つた。

「早う逃げな。早うく」と言いながら、少女は板橋を渡つて、形ばかりの門へはいつた。——。つづく

かくして、あらずじを追つたが、かの蛇男は、花売りの少女の父親であつたのか?。来回は、蛇使いの親の子育てについて…。続く。

ことのはスケッチ (415)

今泉 由利

『グレート・ジャーニー』

上野、国立科学博物館、私の処からとても近いから、しばしば出掛ける。

今回は「グレート・ジャーニー」人類の旅（この星の生き残るための物語）とのタイトに出掛けた。

見終ると、植村直己の経験や、私自身のアルゼンチンで出会えたセリーナさんとの見聞など、かなり「人類の旅」にダブって思われ、グレート・ジャーニーではないけれど、私自身地球の上でしてきたことを振り返る気になった。

○小学校の入学式の日、忙しい母を氣遣ったつもり「一人で行けるから」と出掛けたものの、迷った。満開の桜の木の下で泣いていたら、母が探しあてて下さった。私の一番はじめの一人旅。

○小学校低学年だった。父母が「東京を見ておかなければいけない」と、三人年子の兄私弟を連れ、その頃、愛知県御津から東京まで八時間かかった汽車の旅。はじめて父母とずっと一緒にいられて「びっくり」したのを思い出す。道中、富士山から噴煙があがっていた。（それから後、富士山から煙がたちのぼる絵ばかり描いた）。田子の浦……の和歌を、父が教えて下さって、それから短歌が気になった。

東京での目的は、日本橋でエスカレーターに乗ること、銀座の夜の、ピア・ジョッキがビールで溢れ、零れるネオンを飽かず眺め、上野の西郷さんの銅像に会うこと、だった。

○小学生の時、一人で計画し、汽車に乗り、奈良の大仏様に会いに行った。どうしても会いたかったから。このときは、奈良の「土鈴」を、母に買って帰った。

○東京の学生だった頃、日本各地の織物、染物の伝統工芸士を訪ね、教わる、旅をした。自身の作品の他に、私のために染めて下さった着物、織って下さった着物：人生の宝の持主になるのだった。

○学生を終えると、「自分の物」を全部積み込んだ船に乗り、地球を半周、四十五日間かかった。何日間も水しか見えなかったこと、そのころ、新聞が空を飛んでくるファクシミリが出来、水の上で、簡単ではあるが日本の新聞を読んでみながら、停泊した数々の港は、すべて上陸探検：とはしゃいでいるうちに、住む所も、知人も、言葉も：何もなくて、日本から一番遠い距離の国アルゼンチンに着いてしまった。

「あまりに沢山船に乗ってきて、またすぐ同じ船に乗って帰るのが嫌だったから、何とかこの国で生きのびること、仕事を始めること：テキスタイルデザイナーとしての凶案を持参した先で、セリーナさんと出逢った。セリーナさんと出会えたから、アルゼンチンで生きてこられた。

つづく

編集室だより【二〇一三年 五月】

○水素添加をしない凝固法で作られた。シエクストラバージン・オリブオイル・スプレット[®]が出来るに至った記述「ようこそソーガーさん」柄長葉之輔著をいただく。シオリブオイル・スプレット[®]もいただく。

○「クリムト生誕一五〇年記念展」ウィーンのシェーンブルン宮殿に、今泉由利「仏様」（日本画）[®]展示され、友好を務めた。

○八国山緑地、トトロの森にわけ入る。無心になれた。

○蒲郡市役所より、「二〇一三年、俊成の里短歌大会詠草集」をお送りいただく。

○ホリデー快速おくたま号に乗り、大橋望彦氏の木彫工房「悦鹿」を訪ねる。三河アララギに「ある自然科学者の手記」を執筆下さっている。

○毎週木曜日、滝野川体育館において卓球の練習。

○毎月二回、柳橋旧市丸邸に於て、ヨガ。

○毎月一回、辻照子先生の料理とマナー教室へ。

○世界卓球選手権・パリ。時差により夜中の卓球観戦。

○浜松市秋野不矩美術館、「秋野不矩・沢宏靱展」の招待状をいただく。

○スタレを購入。ペランダを夏モードに整えた。

○国立科学博物館、「グレートジャーニー：人類の旅」にゆく。自身の旅に思いを馳せた。

○国立科学博物館前の巨大な鯨が好き。

○不忍池へ、蓮[®]の様子を調べにゆく。

○小金井公園の空に抜けるユリの木にユリの木の花。ポダイジュの木にポダイジュの花。

○伊藤宗一郎氏を中心にタンゴを歌う仲間とまず、「ヒレ酒」を。後歌う。おどる。

○かさね俳句会の五月吟行、「旧古川庭園」に参加。少し過ぎたバラに物思う。

○ニュージランドの自然保護区に自生するマヌーカの花から集められた蜂蜜が届いた。非加熱、無濾過。

○阿部淑子氏、足立晴代氏と長原短歌会。楽しく。

和菓子街道 (81)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(4)

神戸宿の中心部で街道から離れ、室町時代創建の龍光禅寺に寄り道。この寺で毎年3月に行なわれる大涅槃会で開帳される「神戸の寝釈迦図」は、16畳敷もの巨大な涅槃図で、猫が描かれた珍しい一幅だ。通常、涅槃図に描かれる53種の動物に猫は含まれないが、絵師が釈迦の唇の色に苦心していると、1匹の猫が紅色の絵の具を咥えて来たため、感謝して図に描き加えたのだとか。猫好きとしては親近感を覚える。

お寺の方によると、向かいの近江屋に、この涅槃図に因む「寝しゃかまんじゅう」があるお聞きして、早速、店を訪れた。寛政元年(1789)創業で、神戸城にも菓子を届けていたという老舗菓子屋だ。

寝しゃかまんじゅうは、すこぶる美味しい焼き饅頭だった。肉桂風味の



皮は釈迦の故郷インドをイメージ。表面に散らした黒ごまは、釈迦の入滅に集って涙した人や動植物などを表す。猫型のゴマはもちろん見つからなかったが、猫入り涅槃図と美味しい饅頭だけで充分満足だ。

中のさらし餡は口の中でほろっと溶ける。

◆近江屋菓子舗

住所：三重県鈴鹿市神戸2-17-23

電話：059-382-0030

お知らせ

▽八月号の原稿は、七月一日(月)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△五月二十五日(土)に、六月号の発送を終えました。平成二十五年も、この号で早や半分になろうとしています。月日の経つ早さを感じます。

△発行所には、各地の結社から歌誌を送っていただいています。

その地方、その土地の特色なども感じられて、大変興味深く読ませていただいています。同じ短歌を学ぶものとして、大変勉強になります。

△編集部からのお願として、歌稿は二百字詰の原稿用紙を使用し、一枚に三首ずつ書いてお出しく下さい。(編集、校正などをより円滑に進めるため)

(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様のために連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年六月二十五日印刷 第六十巻 第七号
平成二十五年七月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利

印刷所

三河アララギ会 〒一四一〇〇三二

URL

東京都北区王子本町一の二六の六A

印刷所

T E L (〇三)五九二四一〇六五

振替口座

〇〇八三〇一六一五六三九

E-mail

yur188@cronos.oon.ne.jp

Homepage

http://maizumiyuri.jp/

株式会社

核 創 美